

「人の親切は無にするものではない」

ホス。ピスの 現場から

> 1 <

06.04.17.

は「みなさんに元気付けられていきます」と言う。

◇

大阪府立大で化学を専攻し、工学博士号も取った。当時は学生運動が盛んで、藤原さんもその渦中にい

た。「大学に12年も在籍し、

学内ではちょっとした有名な

人だったんですよ」。博士

課程1年時に学生結婚した

真弓子さん(61)は「私が働

いて、卒業させてあげたん

初はうまくいかなかったが、地道な積み重ねが成果を生み、業界紙などで取り上げられる存在になり、「今年で3期連続の黒字決算です」と胸を張る。フットワーク軽く歩んできた人生だ。進行していた。

ところが、新しい会社を 11つづく(毎週月曜掲載)

【福田隆】

昨年10月に始めた「在宅ホスピス日記」は、がん患者の在宅生活と、それを支える家族やスタッフの様子を17回にわたって紹介した。4月からは、引き続き

メル友450人と交わす日々

ベンチャー設立と突然のがん告知

千里ペインクリニック(豊中市)の協力を得て在宅ホスピスの利用者を訪ねるとともに、病院や施設にも足を運び、多様なホスピスの形をレポートしたい。

「桜や花の美しい画像に連れて、いろいろなニュースが身の周りを駆け巡りま

◇

す。悪いことばかりではありません。前に時いておいた種がそれとはなしにいい芽を吹き初めていたり…。人の親切は、無にするものではないと思います」

肺がんで在宅ホスピスを続ける藤原宣昭さん(64)は、約450人のメル友達がいる。4月初旬に発信したメールの題は「桜の盛り」で、メル友達が送ってくれた全国各地の桜の写真が添えられた。藤原さん

卒業後はコンピューターソフト会社で働いた。「博士号まで取ったのに、化学屋がコンピューター屋になってしまった」。60歳を前に退職し、01年8月、環境分野の小さな会社をつくった。工場廃水から金属を回収し、再利用する事業。当



メール友達から送られた桜の写真を見つめる藤原さん
=4月11日

「『治癒は無理』とはっきり言って下さい」

ホス・ピスの

現場から

> 2 <

2006.05.01.

射で痛みをコントロールする千里ペインクリニック（豊中市）のサポートで、在宅ホス・ピスを始めた。

藤原さんはベッドの近く

に「痛みのチェックシート」を置いてある。痛みを感じた時刻と度合い、服用した

薬の種類、食事の内容などを記入する表だ。在宅生活

では、痛みの緩和だけでなく、食欲、睡眠、排便などを、複数の薬を駆使して、

生活の質を落とさないよ

う、絶妙なバランスを取る。

そのためには、どんな薬をいつ飲んだらどんな効果が

あったのか、飲まない場合はどうだったのか、医師は

つぶさに把握する必要がある。

同クリニックの松永美

佳子院長（41）も「ここまで細かく付けといてもらえる」と、往診しやすいね」と感心する。

◇

4月のある日、血液検査の結果が出た。「異常なし」。

この日の結果が、がんの状態と直接関係ないことは、藤原さんも知っている。それでも、生きていることを素直に喜ぶ夫婦の姿があった。

【福田隆】

つづく（毎週月曜掲載）

3度転移、在宅へ

チェックシートに痛み記入

01年に尿管がんであることがわかった藤原宣昭さん（64）＝箕面市、nbffjwrn@hcn.zaq.ne.jp。環

境分野のベンチャー企業を設立したばかりだっただけに、戸惑いを隠せなかった

付け根のリンパ節に転移していたことが分かった。藤原さんは過酷な薬物治療などに耐え、これも克服した。

それでも、がんは許してくれなかった。昨年6月、肺がんとの診断を受けた。

「来るものが来た」と覚悟を決めた。幸い、手術は成功、後の放射線治療も功を奏し、容体は安定した。

しかし1年半後、ぼうこうがんを発症。再び克服したが、さらに1年後、右足の

抗がん剤治療に8回挑戦したが改善せず、同11月、藤原さんは医師に切り出した。「治癒は無理なんでは

よ？ はっきり言って下さい」。医師は「無理です」と答えた。そして、薬や注



往診の医師に体の調子を説明する藤原さん＝4月11日

ホス。ピスの 現場から

> 3 <

66.05.08.

とのメールが届いた。難民化の恐怖と戦うメル友たち。藤原さんはつぶやくように言った。「(治癒を望むのは)患者の思い上がりかも知れん。でも、助けてほしい面もある」

◇

藤原さんが01年に設立した環境ベンチャー会社の決算がまとまった。3年連続の黒字。重金属の回収再利用技術が、時代とマッチしてきた。広がる未来。「抱

な感じだから、病気も怖くないんですよ」
藤原さんは「周りに気を遣わせたくないから」と、自分の葬儀は行わないつもりだ。代わりに家族に頼んで、「さよならメール」を一斉送信するという。体調は良好、ビジネスも上り調子。そんな希望に満ちた春、藤原さんは「さよならメール」の文案を練り始めた。その姿は、生きる決意と死ぬ決意をひとつにして、後悔なき人生を送ろうとする力強さに満ちていた。

【福田隆】

は良好、ビジネスも上り調子。そんな希望に満ちた春、藤原さんは「さよならメール」の文案を練り始めた。その姿は、生きる決意と死ぬ決意をひとつにして、後悔なき人生を送ろうとする力強さに満ちていた。

体調復活し花見間に合う

希望の春にさよなら準備

肺がんを患い、在宅ホスピスを続ける藤原宣昭さん(64)＝箕面市、メールアドレス nbfjwrmn@hen.zaq.ne.jp。今年2月、胃腸の機能が落ち、1カ月で体重が約10kg減った。夕食

適切な治療や介護がなさ

◇

後に吐いたものの中に、朝食と昼食の食べ物が入っていたこともあった。それでも、がんの痛みや吐き気、眠気を薬でうまくコントロールして体調は好転し、一度はあきらめかけた桜の花見にもなんとか間に合った。4月の検査で、がんの

れず苦しみ続ける患者は「がん難民」と呼ばれる。藤原さんはこの言葉を使いたくないという。「がんは治療が難しいでしょ?あまり声高に叫んでも、無理な面もある」。しかし、数人の友人から「がんになっただが、どうしようもない」



故郷近くの桜の木の下で。体が復調し、なんとか満開に間に合った＝兵庫県内で4月16日、藤原さん提供